

慢性頭痛の診療ガイドライン 2013

日本神経学会／日本頭痛学会 ● 監修
慢性頭痛の診療ガイドライン作成委員会 ● 編

京都大学大学院教授・臨床神経学 高橋良輔

診療ガイドラインに必要な条件はまず、EBMの手法に忠実にのっとって作成されていることであるが、次にどれだけ読みやすく使い勝手がよいかという、読者の利便性を考慮することが挙げられると私は考えている。ガイドラインの目的は医療の標準化であり、広く読まれなければその目的を達成することができないからである。

本書は、その前版の、日本頭痛学会による『慢性頭痛の診療ガイドライン』（2006年）から読者への配慮が行き届いているのが印象的であった。臨床的に重要な問題がクリニカルクエスチョンに網羅されているだけでなく、クリニカルクエスチョンも推奨文も短い文章にまとめられ、解説、文献まで含めて2～3ページ以内に収められている。短時間でポイントがわかる構成をとっており、薬物治療では容量など具体的な記載が充実しているため、若手医師や頭痛の非専門医にとってもベッドサイドで使いやすく、私も大変重宝していた。私自身、日本神経学会編『パーキンソン病治療ガイドライン2011』の作成に携わったが、上記の点で慢性頭痛のガイドラインを良いお手本として参考にさせていただいたものである。

今回のガイドラインも読者を重視した十分な目配りがされ、その上に丹念な編集作業により、いくつかの類似のクエスチョンが一つにまとめられた一方、最新の知見がふんだんにもりこまれている。ガイドライン作成委員会は埼玉医大・荒木信夫教授が委員長、富永病院・竹島多賀夫副院長が副委員長を務め、37名の頭痛診療のエキスパートが委員に名を連ねている。執筆者が多いのにもかかわらず、編集作業が丁寧に行われているため、記載には統一感があり、簡明で読みやすい。ただ前回と比べてボリュームが約1.5倍に増えたので、時間のない読者は、まずはクリニカルクエスチョン、推奨、背景・目的だけをさっと通読して、必要ところを精読するという読み方でも、頭痛診療に役立つ基本知識は頭に入るだろう。

本書は大項目として、「頭痛一般」「片頭痛」「緊張型頭痛」「群発頭痛およびその他の三叉神経・自律神経性頭痛（前版では「群発頭痛」という項目であった）」「その他の一次性頭痛」「薬物乱用頭痛」「小児の頭痛」「遺伝子」に分けられている。

新たにクリニカルクエスチョンが設けられた項目は解離性動脈瘤に伴う頭痛、片頭痛の病態（疼痛、前



兆)、非経口トリプタンによる片頭痛治療、抗うつ薬とトリプタン併用の可否、頭痛を伴わない前兆への対応、慢性片頭痛の治療、変容性片頭痛と緊張型頭痛の関連、発作性片側頭痛治療薬、SUNCT、SUNA（まれな片側神経痛様頭痛発作）の治療薬、小児の慢性連日性頭痛の診断と治療などであり、いずれも最近の研究や診療の進歩を反映した改訂である。

これに加えて、付録として「スマトリプタン在宅自己注射ガイドライン」「バルプロ酸による片頭痛治療ガイドライン（暫定版）」「プロプラノロールによる片頭痛治療ガイドライン（暫定版）」が付けられており、至れり尽くせりの内容になっている。専門医、非専門医を問わず、頭痛診療に携わるすべての医師に必携の書としてお勧めする。

B5 頁 368 2013年
定価：本体 3,500 円＋税
[ISBN978-4-260-01807-4]

医学書院刊